

友の会第6回総会報告

図書館を通して知り合い、 ボランティア活動を楽しみ続ける「友の会」に



橋本中央図書館館長

葛飾図書館友の会第6回総会が4月27日(土)午後3時から中央図書館で開催されました。

「顔を合わせることが少ない会員が話し合う絶好の機会として大切な総会にしたい」との朝野会長の挨拶に続いて、橋本中央図書館館長から「活動を通して図書館への絶大なる支援に感謝する」と祝辞をいただきました。議長に大作さん(児童・YAサービス応援委員会副委員長)を選出、各委員会の委員長が平成24年度の活動を報告しました。

11月の「友の会ウィーク」の開催経過や「印刷博物館」の見学、講演会の開催、「友の会通信」の季刊発行など、ほぼ計画通り各委員会は活動を行ってきたこと、特に月1回開催しているナイトシアターには平均50名近くの来場者が映画を観に来られていること、おはなしくらぶによる「おはなしのかい」も参加者数が定着していること、CD・DVDコンサートも着実に開催できたこと、さらには初めての企画「新春かるた大会」の開催も報告されました。

残念ながら委員会としての活動要件などに不備があった「16ミリフィルムを楽しむ会」の休止もあわせて報告されました。そして平成24年度会計報告及び監査報告などと一括して拍手で承認されました。

◇今年11月に「友の会ウィーク」開催を予定

次に平成25年度の活動計画が提案され、今年度も「友の会ウィーク」を開催することをはじめ、各委員会への会員の参加呼びかけや「友の会」入会者増強の取り組みを含め、着実に委員会活動を続けると、各委員長が説明しました。ホームページの充実やメールによる受信者会員を増やし、支出減に心がける平成25年度の予算案とともに異論なく拍手で承認され、約1時間で議事は終了しました。

◇総会後は、カフェを開店、熱く語り合う

入会手続きをかねた休憩後はライブラリーカフェを開店。“あなたはどっち派”と題し、義経VS頼朝と、謙信VS信玄や信長VS家康、さらには篤姫VS春日局など入り乱れての舌戦・論戦に熱くなる一方、“友の会で何をしますか”を静かに語り合うグループもあり、「友の会をもっと身近に知ってもらう努力が必要」との意見も出されました。

葛飾図書館友の会は今年もアイデアとバラエティーに富んだイベントの開催を続けていきます。皆さん、一緒に楽しく活動していきませんか？ 入会をお待ちしています。



葛飾図書館友の会のホームページ (かつしか とものかい で検索できます)

PC用: <http://katsutomo.jimdo.com/>

石橋毅史氏講演「本屋はこんなにおもしろい」

図書館で聴く「本屋」の話、講演はこんなにおもしろい！

石橋さんが言うところの「本屋」とは、狭義の「書店」「書店員」を意味しない。それは「人」である。では、どんな人か？「本」を手渡すことに躍起になってしまう人、まるでそれをするために生まれてきたかのような人……石橋さんの辞書では彼らこそが「本屋」なのである。

全国各地で奮闘しているさまざまな「本屋」に密着して丁寧な取材を重ね、考え、書き、発言する石橋さんには、明快な歴史観がある。「図書館は書店より古い」がそれだ。書かれたものを集めて人に供する場所や仕組み(=図書館)の中で、古代から現代まで、本と人とのよき出会いのために力を注いできたおびたしい「本屋」がいた。印刷技術の普及で近代産業の一業態としての「書店」が加わってさらに多くの「本屋」が活躍するようになったが、たとえば葛飾区立図書館にも職員という名の「本屋」が確実にいて、わたしたちの利用を日々支えてくれているわけである。

電子書籍の登場も石橋さんに言わせれば、書物をよりハンディにできないかというニーズから生まれた「文庫」「新書」の発明の延長線上にある一つの出来事。それだけで何かがひっくり返ってしまうほど「本」「本屋」「読書」の世界はヤワではないことになる。

石橋さんはつづけて、「本が売れない・読まれない」と言われるご時世にもかわらず、新刊書と古書を独自の選択・分類で混在させながら、夜は居酒屋に変身したり、書籍・雑誌の店頭展示に使っている家具まで販売したり等々の、従来のスタイルにこだわらない「書店」を若い世代が各地で続々と起業している新しい動きや、書店のよいところを大胆に取り入れた図書館づくりで「必見」の福島県南相馬市立中央図書館などを紹介、ついつい「いま目の前



前

にある物事がすべて」になりがちなわたしたちの眼と心を開いてくれた。
豊富な取材経験に裏打ちされた、わかりやすく興味尽きない石橋さんの講演を聴いて、強風が吹き荒れるお天気の中、会場まで足を運んだ50名近くの参加者の多くが、何らかのかたちで本にかかわることにあらためて勇気と自信と誇りを得たのではないだろうか。

(2013年3月10日 14~16時 葛飾区立中央図書館 会議室1)

講師プロフィール

石橋毅史 (いしばし たけふみ/ノンフィクション作家) 1970年生れ。出版社勤務、出版業界紙『新文化』編集長を経て、現在に至る。著書『「本屋」は死なない』(新潮社/2011)は新聞各紙で書評されるなど大きな反響を呼んだ。葛飾区立図書館では同書を2冊所蔵(中央、新宿)。

友の会活動 今後のラインナップ (いずれも中央図書館・無料)

- | | | | | |
|------------------------|-------------------------|----------------|---------|------|
| 広報委員会 | 7月9日(火) キーワード読書会 | キーワードは「時間」 | 午後6時半から | 会議室2 |
| ナイトシアター委員会 | 6月8日(土) | 「地下鉄のザジ」 | | |
| (いずれも午後6時から 会議室1) | 7月13日(土) | 「ひろしま」 | | |
| | 8月10日(土) | 「美しい夏キリシマ」 | | |
| 児童・YA サービス応援委員会 | 6月1日(土)、7月6日(土)、8月3日(土) | 「おはなし会」 | | |
| (いずれも午後3時半から おはなしのへや) | | | | |
| CD・DVDコンサート委員会 | 6月23日(日) | 「モーツァルト」特集 | | |
| (いずれも午後2時から 会議室1) | 7月21日(日) | 「ベートーベン」特集 | | |
| | 8月25日(日) | 「オペラのアリア集」(予定) | | |

ゆったりとしたスペースに専門書があふれる

友の会会員限定企画の見学会も第4回目。今回は、4月から我が葛飾区に開設された東京理科大学図書館（葛飾）の見学です。友の会イベント委員会主催で、5月18日（土）に朝野会長をはじめ友の会会員20名が参加しました。

この大学図書館は5月7日から葛飾区民に公開され、学術研究を目的とした18歳以上の区民で、区立図書館の利用カードを持つ人が利用できます。

金町駅から徒歩8分、「葛飾にいじゅくみらい公園」に位置する広々としたキャンパスの並木の正面に図書館棟がありました。吹き抜けの館内は木製の書架がこちよ。蔵書5万冊のうち自然科学・技術工学の専門書が88%を占めるという大学図書館です。

職員の方より区民が利用できる閲覧・貸出などについての説明に続き、貴重な専門雑誌などが所蔵されている地下の集密書庫から館内見学をスタートしました。一階のホールを取り囲むようにゆったりと木製書架が配置され、階段を回りながら昇る感覚で2階へ。専門書がほとんどで、区民が利用するとしても本当に研究目的の方に限られるだろうなという印象を受けました。理系の学生にも人文系書籍に親しんでもらいたいとの目的で、2階に「黙考書院」という文学全集等が置かれゆったりとしたソファの書齋風のゾーンがありました。こちらはスカイツリーや「にいじゅくみらい公園」が一望できる素晴らしい景観でした。

見学終了後、併設のカフェテリアにて会員の親睦を深める懇談を行いました。友の会の企画で、身近にできた大学の図書館の見学ができ、葛飾の新たな方向を感じることができた貴重な一日となりました。



= 因縁の「黒い雨」上映会顛末記 =

突然、音声は切れるも最後まで鑑賞された方が多数！
拍手までいただき、感激したスタッフでした

「16ミリフィルムを楽しむ会」の突然の活動休止に伴い、既に「広報かつしか」やポスター、チラシなどで予告していた「黒い雨」の映画会を予定通り開催するため、急遽友の会有志がチームを組んで奔走しました。

まず立川市にある都立多摩図書館に映写機とフィルムを借りるための団体登録手続きからスタート。上映資格がないと貸し出ししてくれない規定があり、映写技師さんを探し出し、なんとかクリア。

4月20日（土）午後開催されるこの映画会の二日前、車で往復3時間かけて機材を借りに行き、前日には急遽お願いした技師さんに映写機とフィルムの確認をする試写を実施しました。

映画会当日、70名近くの皆さんが会場の中央図書館会議室に集まり、上映が開始されました。この映画は上映時間123分、3巻にわたるモノクロの超大作。2巻目の途中までは無事スクリーンに田中好子の熱演が映し出されていきました。ところが、突然音声が出なくなり、無声映画に変貌。上映を中止し、来場者に“再上映はできませんが、どうしましょう？”と問いかけたところ、大多数の方々は上映の継続を希望されたようで、約50分間、最後まで音なし、クチパクのスクリーンを覗いていただきました（もちろん、途中で帰られた方もおられました）。そしてなんと終了後、拍手までいただき、上映まで努力したスタッフや会員は大感激！

映写技師さんもこんなことは長年上映を担当してきたが初めてだと憤慨。故障の原因は不明。この「黒い雨」はこれまで3・11の大震災の影響やスケジュールなどの関係で延期されてきた因縁のある映画でした。今回もそのためか、タタリなのかこのような結果になったわけですが、最後の上映会は関係者の悔し涙（？）で終了した次第です。もちろん、翌日にまた機材一式を車で返却に行きました。あらためて来場された皆様にお詫びとお礼を申し上げます。

小学校低学年の頃のこと、近所の親戚の家でたまたま目についた本を、気がつくと夢中で読んでいた。読み終わったとき、それまで感じたことのなかった思いに満たされたことを、今でもおぼえている。物語にどっぷり入り、心を動かされるといふ初めての経験をしたのだ。その本は、『ハイジ』(ヨハンナ・シュピリ作)の子ども向け抄訳版で、『アルプスの少女』という書名だった。原作から大幅に省略されているが、初めて読む子どもが、胸を躍らせ、ハイジと一緒に悲しみ、喜ぶに十分な内容だった。のちに全訳を読み、大人になってからも読み直して、この名作の深い味わいを知るのだが、初めて読んだときになにより魅力を感じたのは、自分の日常生活にはない、ハイジの暮らしぶりだった。ぼつんと建った山小屋に住み、ヤギたちを放牧場に連れていく毎日。干し草のベッドで寝ることには、なぜか果てしなくあこがれた。山で見る夕焼けや、山のお花畑にも思いをはせた。フランクフルトでの場面では、ハイジと一緒に悲しみ(変な話だが、夢遊病という病気には、少しばかりあこがれを感じた)、山に帰れたときには、心からうれしかった。気難しかったおじいさんが心を開く様子にも、子ども心に感動を覚えた。

『アルプスの少女』に魅了された私は、次々と本を読み始めた。特に好きだったのは、いわゆる世界の名作で、『秘密の花園』『森は生きている』『ニルスのおふしぎな旅』『点子ちゃんとアントン』等々、書名を挙げればきりが無い。長編作品をまず抄訳で読み、大人になってから全訳を読むというのは、一生を通じて楽しめる読書の仕方ではないかと思う。

物心ついたときから、自宅の本棚に絵本がたくさんあり、親に読んでもらったり自分で読んだりして楽しんでいた私は、とても恵まれていたと思う。読み物へのステップアップがスムーズだったのは、絵本に囲まれていたおかげだろう。

『ハイジ』に関して、もうひとつ幸運だったと思うのは、本という形で出会ったことだ。アニメ「アルプスの少女ハイジ」は、私が小学3年生の時に放送された。毎週欠かさず見ていたし、大人になってから再放送を見ても涙ぐんでしまうぐらいすばらしい映像作品だが、それだけに、本を先に読めたのは貴重なことだったとしみじみ思う。文章とシンプルな挿し絵だけで、あれだけ夢中になり、想像して楽しむことができたのだから。

(おおさく みちこ 児童・YAサービス応援委員会副委員長)



「葛飾図書館友の会」で一緒に活動しませんか！

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイデアを少しずつ実現してみませんか？

原則として第3土曜日の午後1時から4時まで中央図書館内で、また友の会開催イベント時でも直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員1,000円、賛助会員は1口2,000円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を下記の口座に納入してください。図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、25年度年会費とご記入下さい。また1口500円の寄付も大歓迎です。振替手数料は銀行窓口では120円、ATMからでは80円です。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。入会届は友の会HPからもダウンロードできます。

ゆうちょ銀行	口座番号	00100-7-392065
	口座名称	葛飾図書館友の会

●問い合わせ先 中央図書館友の会担当者(打越さん、吉村さん、清水さん、白井さん) Tel 03-3607-9201

色えんぴつ

最近、本を買ったことがない。読みたければ図書館から借りればいいし、『ボランティヤ、暇なし』で読書の時間も気力も少なくなっている。活字を追うのも億劫になってきた。そういえば最後に買ったのは2年前、旅行用に準備したガイドブックだったかもしれない▼別に書籍を買う資金(家計簿上、これを教養費というらしい)がない訳ではない。ないないづくしだが、要するに「断捨離」ができないのだ。特に捨てることに何となく罪悪感があり、躊躇する▼これまで買って読んだ雑誌も含め、書棚らしきものに押し込まれた「皆さん」は日光にさらされ、色あせ、茶色に変身。その本棚にはCDも不法占拠し、ごちゃ混ぜの状況だ▼書齋とは似ても似つかない小部屋は各種書類の山々が連なる。何かあった時に役立つのではという妄想を捨てきれず、どんどん積んでいく。誇りならぬホコリを被っている始末。少しでも…と、クリアブックを百均で大量購入し、指をなめながら無差別に差し込んでいくもんだから、逆にクリアブックが増えただけで、何をどこにファイルしたのか分からず、探し回る始末▼「島」は本と書類の山脈に囲まれ、島主の居場所がだんだん狭まってくる。そぼのTVからは「今でしょ」が聞こえてくるが、こだまのように消えていく。なんとかしなければ追い出されるぞ、ゴミの山に！

(中里広報委員長)